

明日の日本のために 平成23年5月7日

資料提供 岡山県議会議員 波多 洋治

メルマガ「蘇れ美しい日本」より

◎西村真悟 やはり、書いておくべきだろう

原子力発電のことである。

今、福島第一原子力発電所の周辺では、数千頭の牛馬豚が殺処分されている。

政府は酪農農家に家畜とともに退避することを許さず、牛や馬は、一ヶ月以上放置されて食料を与えられず、餓死したり、自分で食料を調達するようになっている（これを野生化と言って政府とマスコミは危険視している）。これを殺すという。

自活している牛馬は立派ではないか。

かつて南極観測の越冬隊が、確か昭和三十三年か四年に、どうしても樺太犬を連れて帰ることができず、南極大陸の昭和基地に放置したことがあった。

そして、一年近く経って再び南極観測隊が昭和基地に行くと、太郎と次郎という樺太犬は、頑張って生きていた。彼らは、観測隊のヘリの音が分かって、喜んで雪原を飛び跳ねて人間がきてくれたことを喜んでいた。日本中が感動した。太郎と次郎という模型飛行機が売られていたのを思い出す。

福島原発周辺で自活している馬・牛・犬・猫・カナリヤ・文鳥は、立派ではないか。何故、この度は樺太犬の太郎と次郎のように「生きていてよかった、これからは生かしてやろう」とならないのか。

平素は、土管に犬が詰まったり、煙突の上に猫が乗って降りられなくなったりしたとき、消防隊が出動してその猫犬を助ける場面がニュースになったりする。

どうして、この度は、そうならず、殺すのか。

生物を、人間と同じほ乳類を、みだりに殺すな。

何故殺すのか。菅、枝野、答えろ。

以上のことを思いながら、これから本論に入る。

福島第一原子力発電所。

この危険度レベル7は虚偽発表で、実は安全ではないのか。

これが、第一の問題提起だ。

その上で注意喚起したいのは、次の彼らの素性である。

菅、仙石、枝野、そして、彼らを支える社会党から民主党に移った党事務局員の連中と総評系労働組合。

これらは、もともと反原発闘争をしていた連中だ。特に、菅と仙石は、反政府的運動家、活動家としての経歴をもっている。

さらに彼らは、世界組織であるインターナショナル運動即ちコミンテルンに繋がり、その思想のもとで青春時代に学園闘争をやりまくった経験を持つ。

つまり、彼らは、世界的な西側における「反原発運動」と、西側の核だけを阻止する為の「反核平和運動」に繋がる連中である。

そこで、欧米に発する世界的な反捕鯨運動の進め方、特にシーシェパードなどの手段を選ばぬ反対運動戦略を思い浮かべた上で、仮に、反原発を世界的に展開しようとする戦略家なら、マグニチュード9・0の巨大地震に遭遇した福島第一原子力発電所事故を如何に利用するか、このことに思いを巡らせて欲しい。

私が、反原発運動家で、シーシェパード的発想をすれば、福島原発の危険度を煽り、その周辺住民を極度の不安に陥れて共同体を破壊し、世界の原発を持つ国の住民を同じように不安がらせ、そこから原発を追放し一掃する世界的運動へつなげる。

さて、菅、仙石、枝野と民主党および支援組織特に労働組合の素性は、この世界的原発禁止運動の謀略に取り込まれる要素が、ため息が出るほど十二分に揃っているではないか。

つまり、菅とその内閣は、運動家としてのつながりの中で、「総理の地位にある世界的反原発運動家」となり、福島原発事故を、世界の原発廃絶に拡大していくためのテコとして利用し始めたのではないか。

ひょっとすると、

「反原発を推進した日本の菅総理大臣、貴方は人類の未来を明るくしたのでノーベル平和賞を授与されるであろう、その為に、我々も頑張るから、連帯しよう」、との呼びかけに我が国の空きカンが、既に頷いているのではないか。

少なくとも、現在までの菅内閣の原発事故に対する対応は、風評被害の徒な拡大も含め、原発反対派からは拍手喝采ものであることは確かである。

彼らは、原発事故が深刻であれば深刻なほど喜ぶ連中だからだ。そして、それを喜ばせている菅総理と彼の内閣は、既に世界的な反原発運動の一員となっており、その運動戦略のもとに動いているのではないか。

そこで、はじめの第一の問題提起に戻る。

即ち、福島原発は安全なのではないか。

放射線防御学、放射線影響学というのがある。これらは、医療におけるレントゲンの影響を調べることから始まって、広島や長崎への原子爆弾使用を決定的な契機として始まった学問である。

この私は、この学問は全く知らん。無知である。しかし、この学問の専門家は知っている。

札幌医科大学教授の高田 純氏は、四月十日の昼、福島第一原発の正門の前に防御服を着ることなく立って、ここは安全ですと語っていた。

次に、東京大学医学部の稲 恭宏博士は、福島原発は安全と言い切っている。

また、福井青山学院大学教授は、低線量率放射線は、健康にほとんど影響ないと言い、稲博士はかえって健康によい、と言っている。

さらに、地上より放射能が三百倍以上多い、宇宙空間で長期間滞在した宇宙飛行士は、放射能から何ら悪影響を受けておらず、かえって宇宙に行く前より健康になっている、と報告されている。

つまり、繰り返す。福島原発は安全ではないか。

さて、反原発運動の経歴を持つ菅総理が言い切らないことを、最後に断言しておく。我が国の存立のために、原発による発電はこれからますます必要だ。

原発を廃止し全て化石燃料に切り替えて、現在と同じような国家的活動、経済的活動ができる、と考えるのはエネルギー政策的にも、歴史から学ぶ国家戦略からみても、非現実的だ。

かつて、我が国はアメリカと戦争した。何故戦争を決意したのか。アメリカが我が国への石油の供給を止めたからだ。

仮に、我が国が全て化石燃料による発電に戻ったとしよう。

我が国に、その膨大な化石燃料があるのか。

無い。

そうであれば、仮に将来、我が国への化石燃料供給を止める国が現れたとするならば、我が国は、また戦争に追い詰められるではないか。

その時、日本国民は、経済活動不能によって数千万人が失業し、餓死者もでる苦境に唯々諾々と耐え続けることはできない。

化石燃料に頼るこのような脆弱な国家に陥ることを回避するのが、真の政治家の務めなのだ。

やはり、我が国には、原子力による発電が必要だ。

◎ビジネス情報月刊誌「エルネオス」5月号

URL : <http://www.elineos.co.jp/>

巻頭言「池 東旭の賢者に備えあり」

「アフター3・11 災い転じて福に……」

——全世界が称（たた）えた被災民の忍耐

三・一一東日本大震災は国難だ。死亡、行方不明二万七千余人、避難民十七万人、物的被害は天文学的数字になる。放射能汚染の恐れは国際的に拡散した。

大震災後、全世界マスコミは被災者の節度と秩序、ボランティアの活動をこぞって称えた。ほかの国では暴動、掠奪が起きた。だが苦難に耐え、言挙げしない被災者の姿は日本人の美德の具現と賞賛された。しかし、海外でも政府と企業の対応を批判する声が高い。世界で、日本人は一流で立派だが企業は二流、官僚は三流、政治家は四流と評価された。

地震・津波は天災だが、原発事故は人災だ。当事者は「想定外」と弁明する。だが、対

策は後手、後手にまわり、小出しして事態を悪化させた。情報開示も混乱した。当初から国家非常事態を宣言して国を挙げて対処すべきだった。ほかの国ならそうした。泰平ボケした日本はそれができない。根拠となる法令がない。国家として不可欠な危機管理能力を具えていない。大震災は日本の国家システムの欠陥を白日のもとにさらけ出した。

——危機管理の機能不全

大震災は天災だ。しかし、これは冷戦後二十年間閉塞ムードにさまよった日本が立ち直るチャンスになる。一九八六年四月のチェルノブイリ原発事故は共産党支配下にあったソ連の非能率、無責任を暴露した。これをきっかけにゴルバチョフのペレストロイカ（改革）、グラスノスチ（情報公開）がスタート、一党独裁の呪縛は解け、五年後、ソ連は解体してロシアは再生した。大震災は戦後六十五年続いた日本の政治・行政・企業システムの機能不全をあぶりだした。三・一一で政治の無策、官僚の独善、企業の貪欲が赤裸々に露出した。

今こそ、原発存廃より急務は国家システムの改造だ。国家システムの改造とは、普通の国家、当たり前前の国に生まれ変わることだ。当たり前前の国とは、国民の生命財産を守る、侵さず侵されない防衛力を備え、健全財政を維持し、身の丈に合う国際協調をするなどである。今の日本はこの定義からことごとく逸脱している。国民が拉致され、領土を侵犯されても泣き寝入り。国の安全保障は他国に丸投げ。赤字財政でも無駄遣いをやめず、国連で分不相応な負担をしながら三等国扱いされる。総理は一年で使い捨て。税金を納めるほうは地獄で、貰うほうは天国。愛国が罪で売国が威張り、海外で反日デモをする議員が閣僚になる等々、外国から見ればアブノーマルな国としか思えない。

——国家システムのリストラ

東日本大震災（マグニチュード九・〇）は六十五年間続いた戦後日本の終焉を告げる象徴的出来事だ。一八五五年、江戸を強打した安政大地震（M六・九）は徳川幕府二百七十年の土台を揺るがし、明治維新を生んだ。一九二三年に起きた関東大震災（M七・九）はGDP一三%の国富を灰燼にして死者十四万人の被害をもたらした。それは富国強兵の理念で発展した明治日本の終焉でもあった。一九四五年、敗戦の日を境に戦後日本でエセ民主主義が横行した。権利だけ主張して義務と責任は果たさない。この規範様式（パラダイム）は三・一一でその賞味切れが判明した。

三・一一はあらゆる分野でパラダイム転換の起点になる。憲法改正をはじめ、選挙改革、行政革新、東京一極集中の是正と地方分権化を進め、国家システムを早急にリストラして、海外で国力に相応する主張を堂々と発信する時である。震災の惨禍は敗戦の時に比べ劣らない。だが日本は、敗戦の苦難を乗り越え復興した。日本は大震災の試練から立ち直る。疾風で勁草を知る。震災で発揮された国民挙げての支援、集団避難民の健気な生き方は、その勁（つよ）さを立証した。日本人の底力を結集して目標に向け全力で取り組む。災い転じて福となす。それが震災を免れ、生き残った人たちが非命で亡くなった犠牲者に対する供養であり、責務なのだ。

（国際ジャーナリスト＝ソウル在住）

◎目良 浩一 【菅 不在で、韓 進出】

4月26日の米国の新聞は、日本と韓国の外交技術の差を鮮明にした。ロスアンゼルス・タイムスには、日本の今回の災害に同情して韓国内で日本の災害救済のための募金活動が極めて活発に行われていたとし、韓国赤十字社はすでに4千万ドルを受け取り、朝鮮日報は一千万ドルを受領していた。慰安婦達さえも一万5千ドルを献金していた。これはこの二つの国の今までの関係からして、前代未聞のことである。しかし、このような二国間の協調的な動きは、日本政府の3月末の竹島を日本領として学校で教えることの声明と4月1日に公開された外務省の「2011外交白書」に竹島が日本領であることが明記してあることで、韓国人の感情は、再び反日に戻ったと報道している。

もうひとつは、ウォールストリートジャーナルの総合部の裏面全体を覆う国際ヨットレース・コリア・カップの広告である。ヨットレースの広告をWSJの一面全体に出す必要は、通常ないと考えるのだが、そこには、明らかに政治的な狙いがあるのだ。「竹島(独島)」と「東海(日本海)」である。このレースは韓国の民間団体の主催で、5月26日に始まり6月6日に終了することになっているが、主なレースはポハン(浦項)から鬱陵島、そこから竹島、そして竹島からポハン(浦項)へという540キロの長距離のレースである。其の広告には、日本海の代わりにEast Sea と書かれ、竹島はDokdo と書かれていて、韓国がDokdoを領有し、日本海はなくなり、それが東海になったような印象を与えるのが主な目的であるように思える。それに関する情報は www.ForTheNextGeneration.com というサイトで見られるが、そこでは日韓の領土問題や慰安婦問題が大きく取り上げられていて、全くの政治的な宣伝の道具である。

3月11日の東日本大震災の発生後、日本政府は災害被害者の救援や被害の復興、そして原発事故の終息に忙殺されていたのは事実であるが、政府の指導者が政府機関を十分に活動させることができずに、領土問題の政府発表が最悪の時期にされることになった。竹島領有に関する発表自体に異議があるわけではないが、其の時期は、調整することができたはずである。外交未経験・無思慮の首相・外務大臣を擁する国の悲劇である。

国際ヨットレースに関しては、彼らは、竹島の実効支配を最大限に利用しようとしている。彼らは、竹島領有と日本海の名称の問題をまず欧米の人々の理解を得ることで、世界の常識にしようとしている。この態度は、日本一国だけですべてを片付けようとする日本の態度と対照的である。このことは、第二次世界大戦の時の中国と日本の政策の違いを思い起こさせる。日本は、日本独自の政策を作り、他の国の協力は、ほとんど問題にせず、其の実行に邁進した。一方、中国は、特に米国の協力を得ることに努力した。具体的には、米国の報道機関に直接に情報を与え、米国の新聞・ラジオを通じて情報を流し、米国の指導者に接触して、援助を依頼するというものである。その結果は、米国をパートナーとして、戦争に引き込むことに成功し、後に戦勝国の一員となったのである。

単にヨットレースではないかと言うなかれ。日本の独善的な態度は、日本を世界の国々から引き離し、再び孤立した状態に導くかもしれない。それに対して、韓国の米国などに対する働きかけは、論理的な整合性は別として、共感を呼び、強力な味方になる可能性が

ある。日本は、過去の大戦の経験から国際関係の重要性を学ばなくてはならない。

日本政府は、ある国の行動に対して、反応することはあるが、新しく何かを作り上げることはほとんどない。特に、現在の総理大臣は、国民に方向性を示すことはない。「一生懸命にやる」という言葉は、よく聞くが、それは意味を成さない。日本が具体的な行動の指針を示さない間に、他の国は、その権益を追求して、はるか彼方に前進しているのである。（米国在住）

◎西村真悟 たずね人の時間

遠い記憶に、ラジオから「たずね人の時間」という放送が流れていた。

それは例えば、「満州の〇〇町の一丁目に住んでいた〇〇さん、お隣に住んでいた〇〇さんが探しています」というような内容の放送で、延々と流れていたのを憶えている。

昭和二十年代から三十年代の初めにかけて、三百万人の戦没者が出た大戦の後の十年間ほどは、何時も誰かが誰かを探していたのだ。

その後、原民喜の「夏の花」という短編を読んだ。

それは、原自身も被爆した原爆投下後の広島を舞台にした短編で、その終わりは次のようだった。

広島町の町を歩いていると、向こうから歩いてくる人が私を見て笑顔になり嬉しそうに近づいてくることある。しかし、その人は、はっと気がついたように失望の表情に変わりうつむいて悲しそうに通り過ぎてゆく。

広島では何時も誰かが誰かを探している。

この度の東日本大震災の被災地の死者と行方不明者の多さを思うとき、何時も「夏の花」の「何時も誰かが誰かを探している」、という情景を思い浮かべる。

また、画面で見る被災地の無機的な見渡す限り瓦礫の平原になってしまっただけで人の気配がなくなった風景の中に、身内を捜す悲しみが漂っているように感じる。

そして、たびたび各地を訪れながら、未だ被災地を訪れて瓦礫の一つでも取り除くこともせずにいる自分を恥じる。

そのような思いの時、本日の産経新聞朝刊を郵便受けから取り出すと、一面に「眠れぬ墓標 特別編 絶海の硫黄島」の一回目の特集が為されていた。

硫黄島で戦没した祖父の遺骨を捜しに島に渡り三週間遺骨収集にあたった福岡県久留米市の飲食店を営む四十歳の女性の話から特集は始まっていた。

その方の母は、祖父が昭和十九年七月十四日に硫黄島に上陸してから二ヶ月後に生まれた。家には、祖父の「娘の顔を見たい、写真を送られたし」、「写真を拝見、うれしく存じ・・・」という手紙が残されているという。

母は祖父が自分の誕生を待ち望み、会いたいと思っていたことを知り、祖父への思いを強くし、その母の思いがこの女性に祖父を強く意識させ、「おじいちゃんに呼ばれて」遺骨収集団に参加したという。

この女性は、硫黄島での遺骨収集に従事して、「祖父の本当の目的は、自分の遺骨が帰ることではなく、救われない多くの魂を連れて帰ってほしい、と。その為に呼ばれたんだと思うようになりました」と振り返り「また、島に呼ばれる気がする」と言われる。

この女性は、八百二十二分人の遺骨とともに本土に向けて帰路につく機内で、不思議な体験をしたという。

それは機内全体に心地よい空気が充満している、遺骨が帰れることを喜んでいるのだと思えたことだ。

今朝、この硫黄島の特集を読んで、昨日との符合を感じた。

昨日私は、大阪で主に経営者があつまる七十人ほどの勉強会で、「日本の再興」という題で話をさせていただいた。

そのなかで、この度の東日本大震災を国難と位置づけ、多くの犠牲者が望んでいることは、単なる復旧ではなく「日本の再興」なのだと述べた。

さらに、日本を再興するためには、「日本」を知らねばならない。「日本」を知るとは英霊を知ると言うことだとして、硫黄島の戦いを語った。

硫黄島の挿鉢山に二度にわたって翻った「日の丸」のこと、将兵は、一日でも長く敢闘して米軍を硫黄島で阻止し、その間、本土の子供達が米軍の空襲から逃れるために疎開する時間を稼ごうとしたことなど、を語った。硫黄島で戦った英霊を知ることなくして「日本の再興」はありえないからだ。

そしてまた、この度の大地震で亡くなられた方々を忘れて「日本の再興」はありえない。

十年以上前に、沖縄から自衛隊機で硫黄島を訪れた。機が島に近づいて、コックピットから初めて挿鉢山を見たとき、思はず翼を振って低空で島を一週廻ってから着陸してほしいと機長に頼んだ。

旋回する機から見た島は、鬼哭啾啾、鬼が泣くように見えた。

島には海上自衛隊と航空自衛隊の隊員達が駐屯している。

色々な怪奇現象が起これと言われていた。

夜、宿舎のおもてをザックザックザックと兵隊が行軍する軍靴の音が聞こえる。

ある時、皆が寝静まった部屋の中で一人の隊員が盛んに何か楽しそうにしゃべっている。彼によると、その時、旧軍の兵隊達が訪ねてきたので車座になって酒を飲んでいたという。

また、硫黄島は火山島で湧き水はなくたまに降る雨水しか飲めない。従って、硫黄島の摂氏五十度を超える地下壕に潜んだ日本兵が一番欲したのは、水だった。

そこで、駐屯する自衛隊員達は、寝るときにコップ一杯の水を部屋に置いておくようになった。そうしなければ夜中にうなされるからだという。

硫黄島守備隊司令官、栗林忠道中将の昭和二十年三月十六日の決別電報にある辞世の歌は次の通り。

国のため 重き務めを 果たしえて

矢弾尽き果て 散るぞ 悲しき

平成六年、天皇皇后両陛下は硫黄島に行幸された。

この行幸の際の両陛下の島での御製と御歌を記しておきたい。

天皇陛下の御製は、万葉集以来の天皇と臣下が歌をもって意思疎通をするという我が国の伝統にのっとり、栗林中将の最後の思い、「悲しき」、に応えられたものである。

また、皇后陛下の御歌は、喉が渴いていた兵士達に母のように語りかけられたものである。

なお、この天皇皇后両陛下の硫黄島行幸が為された後、島では先に述べた怪奇なことは無くなったと言われている。

御製

精根を込め 戦いし人 未だ
地下に眠りて 島は悲しき

御歌

慰霊地は 今安らかに 水をたたふ
如何ばかり君ら 水を欲りけむ

私は、皇后陛下のこの御歌を、長い間、とぎれることなく詠み終えることができなかつた。詠み始めると、こみ上げるものがあり途絶えるのだ。

天皇皇后両陛下は、硫黄島の英霊に対しても、平成十四年十月二十日の北朝鮮に拉致された被害者五人の帰国に際しても、そして、三月十六日、この度の東日本大震災に際しても、

国民に直接話しかけられてきた。

そして、硫黄島の将兵は安らかに鎮まり、

拉致被害者問題は「私たち皆」の悲願の救出運動となり、

この度の東日本大震災は単に被災地のことではなく、

陛下の言われる「私たち皆」即ち全国民が力を合わせて乗り越える「国難」となった。

「日本の再興」とは、

この百二十五代、二千六百七十一年にわたる万世一系の

天皇陛下（すべらみこと）と国民との「皇（すべらぎ）との絆」をありがたく確認することから始まる。

この確認無くして日本の再興はない。

このことを、この度の大地震でも確認できた。

よって、国家再興の第一歩は、天皇陛下によって示されたのだ。

本日は（も）、「たずね人の時間」から、思いが自然にここまでできてしまいました。この拙文を、最後までお読みいただき、ありがとうございます。